

株式会社 日本レーザー

インタビュー日程:2010年10月20日

インタビュー先:株式会社日本レーザー

代表取締役社長 近藤宣之様

Q. 日本レーザーでは随時入社を認めていますがそれにはどのような効果がありますか。

A. 弊社では常時オープンに採用していて、Webを通じて毎月応募者がいます。効果は、かなりの経歴を持っている人でも門を叩いてくれることがあるということです。例えば、京都大学で物理学の博士課程を卒業した後、アメリカの国立研究所、日本の理化学研究所を経て日本レーザーでPh.Dとして30代で営業員になったケース、大阪大学から東大の修士を経て就職した日立製作所

を退社して入社してくれた20代の社員もいます。また、外国人採用もオープンに行っており、これまで5人の中国籍社員を正社員として採用しています。現在は上海生まれの営業員と、業務として働いている女性社員がいます。

Q. 外国人採用について、どのような基準を設けているのでしょうか。

A. 外国人採用では、日本語ができることが条件です。留学しているため日本文化にもある程度は馴染んでいます。英語ができて、更にビジネス経験もある程度あれば直ぐに活用できます。技術職は技術があれば良いのですが、営業だけは日本語ができないと難しいですね。



Q. 外国人を採用する目的は何でしょうか。

A. それは外国人を採用することが職場に刺激を与える事です。ある中国人社員の話をしませう。彼女は日本語がはじめは得意ではありませんでしたが、1年半ぐらい勤めた後、日本人になると言い出し帰化申請しました。両親は中国で年金生活をしています。日本人になったあと、半年後に会社には辞表を出し、

アメリカに留学して MBA を取得しました。彼女は何故日本人になり、何故アメリカに行ったのかというと、今後はアジアが中心となるため、日本語、英語、中国語が話せれば完璧だと考えたからです。また、日本人になれば渡航制限ありません。この話のポイントは、ほとんどの日本人が内にこもっている中でも、同僚がこのような考えをすると、職場はどんどん国際化するのだということです。本当に職場のいい刺激になります。

Q. やはりそういった特別能力の高い外国人以外は採用されるのは厳しいのでしょうか。

A. 外国人も日本人も同じ基準で採用しています。外国人も日本人との競争にさらされているし、日本人にも、TOEIC500点は最低限クリアするよう求めています。つまり日本人には英語を求め、外国人には日本語を求めるといことです。現在社員の25%以上が、TOEIC800点以上で、900

点以上に限れば15%います。

中国人社員、方 倩(ファン)さんに対するインタビュー

経歴: 中国で大学卒業後、二年間働き、その後日本に留学。一年間日本語を学び横浜国立大学の国際貿易部門でマスター取得。その後、日本レーザーへ。

Q. 10年前の日本での就職活動について、感じたことを教えてください。

A. 大学で何を勉強したかは聞かれず、集団・チームワークを重視しているのが印象的でした。中国では、「うちの会社であなたに何が出来るのか」が重視されています。

Q. 中国では留学はどのように支援されていますか。

A. 中国人がアメリカで高い成果を上げているため、アメリカが中国を支援しており、中国人留学生の多くがアメリカに行っています。日本人で、アメリカで成果を出している人が少ないことが、アメリカの日本支援の少なさに表れているのかもしれない。

Q. 日本レーザーはファンさんにとって、どのような職場でしょうか。

A. 非常に良い職場環境が用意されていると思います。日本レーザーには制限があまりありません。何か自分のやりたいと思うことがあればそれを相談できる上司がいます。この会社は可能性が高く、自己実現の舞台となっています。

今回のインタビューでは中小企業の代表として日本レーザーにお伺いし、とても貴重なお話を聞くことができました。日本レーザーでは常時オープンに採用活動を行っている。それにより、国籍問わず優秀な方が門を叩いてくれているとのことだった。自由度の高い採用活動を行う事が、企業側にもメリットをもたらすことを知ることができた。また、現場で働く中国籍の社員の方とも御話する時間を設けていただいた。国籍に関係なく生き生きと働いている様子が分かり、多様性を受け入れる環境が整っていることを感じる事ができた。「多様な価値観を取り入れ、組織をゆさぶる。それにより組織を活性化させる」という近藤社長の言葉が印象に残るインタビューとなった。

(追記: 本刊行物出版間近に、日本レーザーが「第1回『日本でいちばん大切にしたい会社』大賞」において、中小企業庁長官賞を受賞されたとのニュースが届きました。この場を借りてお祝いを申し上げますとともに、本刊行物を通じて、私達にも日本レーザーの取り組みを社会に広めることができることを誇りに思います。)